

地の美、地の心、知の技  
青森県伝統工芸品  
Traditional Crafts from AOMORI Prefecture  
Official Guide Book



青森県ホームページ「青森県の伝統工芸品及び伝統工芸士（一覧）」



青森県経済産業部 地域企業支援課

〒030-8570 青森市長島1丁目1番1号  
TEL:017-722-1111（代表）

発行：2026年3月 青森県



## 青森県伝統工芸品とは

青森県には、歴史と風土に培われ、生活の中で受け継がれてきた工芸品が数多く存在しています。これらの工芸品の価値と魅力を高め、工芸品製造業者の製造意欲の向上及び工芸品産業の育成・振興を図ることを目的として、平成8年2月に青森県伝統工芸品指定制度を創設しました。

### 指定要件

- 主として、日常生活の用に供される工芸品であること。
- その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- 伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。
- 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられるものであること。
- 当該工芸品が、おおむね50年以上の歴史を有するものであること。

以上の要件をすべて備え、青森県伝統工芸品指定審査会の意見を聴いて適当と認められるとき、知事が「青森県伝統工芸品」として指定します。

## 青森県伝統工芸士とは

県指定伝統工芸品の製造業者のうち、高度の技術・技法を保持する者を県伝統工芸士と認定することにより、社会的な評価を高めるとともに、従事意欲と技術の向上を図り、伝統的技術又は技法の指導者として工芸品の振興、後継者の育成と伝統工芸品の次世代への継承に寄与することを目的として、平成13年11月に青森県伝統工芸士認定制度を創設しました。

### 認定要件

- 青森県内に居住していること。
- 伝統工芸品の製造の実務経験年数が12年以上あり、かつ現在もその製造に従事していること。
- 伝統工芸品の製造に関する高度の伝統的技術又は技法及び必要な知識を有し、その維持又は発展に努めていること。
- 後継者育成に熱意のある人。
- 青森県伝統工芸士にふさわしい高潔な人格を有すること。
- 経済産業大臣認定の伝統工芸士でない人。

以上の要件をすべて備え、青森県伝統工芸品指定審査会の意見を聴いて適当と認められるとき、知事が「青森県伝統工芸士」として認定します。

## 国が指定する伝統的工芸品

昭和49年5月25日に公布された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき経済産業大臣が指定するもので、次の5つの要件が必要です。

### 指定要件

- 主として日常生活の用に供されるものであること。
- その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- 伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。
- 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること。
- 一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているものであること。

以上の要件をすべて備え、産業構造審議会がそれを認めるとき、経済産業大臣から「伝統的工芸品」に指定されることになります。

### 青森県伝統工芸品マーク



「人」と青森県の「A」を暗示しながら毛筆で「伝統性」を、底辺の長方形で「現代性」を表現しています。「地の美 (Red)」は、青森県伝統工芸品の「美しさ」と伝統工芸士の「情熱」をイメージ、「地の心 (Green)」は、青森県の伝統工芸品に込められた「温もり」「和む」などのココロをイメージ、「知の技 (Blue)」は、青森県の伝統工芸品と伝統工芸士の知性ある「技」と創造性をイメージしています。

## 青森県伝統工芸士一覧

### 津軽塗

- ・片山 勉 / 弘前津軽塗商工業協同組合
- ・秋田 良一 / 弘前津軽塗商工業協同組合

### 津軽焼

- ・高野 博 / 高野陶房
- ・野呂 薫 / ひろの窯
- ・坂本 羊子 / 津軽藩ねぶた村

### 八戸焼

- ・波邊 真樹 / 波辺陶房

### 津軽びいどろ

- ・芳賀 清二 / 北洋硝子株式会社
- ・篠原 義和 / 北洋硝子株式会社
- ・神 正人 / 北洋硝子株式会社
- ・館山 美沙 / 北洋硝子株式会社

### あけび蔓細工

- ・三上 徳仁 / 有限会社宮本工芸

### 津軽竹籠

- ・三上 司

### 津軽傳統組子

- ・齊藤 正美 / 津軽傳統組子館 (建具工芸・齊藤)

### 南部花形組子

- ・館 功 / 館タテグ工芸

### こぎん刺し

- ・荒木 悦子 / 前田セツこぎん研究会
- ・須藤 郁子 / 有限会社弘前こぎん研究所
- ・千葉 弘美 / 有限会社弘前こぎん研究所
- ・工藤 夕子 / 三つ豆

### 南部菱刺し

- ・天羽 やよい
- ・中村 禮子 / 南部菱刺し工房アトリエ繚 HANADA
- ・中村 晃子 / 南部菱刺し工房アトリエ繚 HANADA
- ・横井 充子
- ・工藤 まさ / 南部菱刺し西野刺っ娘の会
- ・西野 美波 / 南部菱刺し西野刺っ娘の会
- ・高橋 博子
- ・山田 友子 / 南部菱刺研究会・つづれや
- ・北向 春枝

### 津軽裂織

- ・村上 あさ子 / テキスタイルスタジオ村上
- ・村上 始 / テキスタイルスタジオ村上
- ・倉内 尚子 / 裂き織り工房ボンテ
- ・葛西やえ子

### 南部裂織

- ・井上 澄子 / 八戸南部裂織工房「澄」
- ・岩淵 洋子 / 八戸南部裂織工房「澄」
- ・澤頭 ユミ子 / 南部裂織保存会
- ・長畑 恵智子 / 南部裂織保存会
- ・松本 律子 / 下北南部裂織
- ・川原 和子 / ており工房みちのく
- ・三橋 照勝 / 南部裂織七戸町保存会
- ・三好 千佳 / さきおり CHICKA
- ・氏家 幸子 / 八戸さき織の会
- ・工藤 久美子 / 八戸さき織の会
- ・川岸 延子 / 仏ヶ浦裂き織り

### 津軽組ひも

- ・川口 良子 / 津軽組ひも工房
- ・佐藤 留美子 / 津軽組ひも工房

### 津軽打刃物

- ・三國 弘 / 三國刃物製作所
- ・三國 博英 / 三國刃物製作所
- ・田澤 幸三 / 田澤刃物製作所
- ・吉澤 俊寿 / 有限会社二唐刃物鍛造所
- ・三國 徹 / 三國打刃物店

### 八幡馬

- ・高橋 利典 / 株式会社八幡馬

### 下川原焼土人形

- ・阿保 正志
- ・高谷 智二 / 高谷下川焼土人形製陶所

### 温湯こけし・ずぐり独楽

- ・盛 美津雄 / 津軽こけし工人会
- ・阿保 六知秀 / 津軽こけし工人会
- ・阿保 正文 / 津軽こけし工人会

### 弘前こけし・木地玩具

- ・長谷川 健三 / 津軽藩ねぶた村
- ・長谷川 優志 / 津軽藩ねぶた村

### 錦石

- ・小田桐 吉津 / 小田桐錦石研究所合同会社
- ・須藤 伸之 / 須藤錦石加工所
- ・小田桐 道広 / 石小屋

### きみがらスリッパ

- ・三畑 ヒロ子 / 十和田きみがらスリッパ生産組合
- ・古館 よしえ / 十和田きみがらスリッパ生産組合

### 五戸ばおり

- ・稲村 幸男

### ねぶたハネト人形

- ・今井 陽子

### 津軽凧

- ・成田 幻節 / ねぶた・凧のなりた
- ・溝江 由樹 / 津軽藩ねぶた村
- ・高橋 勝良 / 高橋紋章染工場

### 太鼓

- ・塩谷 一真 / 塩谷太鼓店

### 金魚ねぶた

- ・檜山 和夫 / 津軽藩ねぶた村
- ・高橋 勝良 / 高橋紋章染工場
- ・成田 幻節 / ねぶた・凧のなりた

## 伝統工芸士・伝統工芸品の紹介

令和7年度に新たに認定・指定された  
伝統工芸士・伝統工芸品を紹介します。

### 〔太鼓〕“Taiko” (Dram)

塩谷 一真さん

令和7年度認定



塩谷さんは、平成25年(2013年)、家業を継ぐため15歳で父に師事して以来、塩谷太鼓店4代目として日々技術を磨いています。ねぶたまつりの運行団体や県外の和太鼓奏者など、顧客の求める音を出すため、熟練の技術で皮の部位や厚さを調整するほか、県内外の祭りに赴き音色を研究しています。職業体験で店を訪れた小中学生に、太鼓の歴史や製造工程を教えるなど、文化の伝承と後継者育成に貢献しています。



### 〔弘前こけし・木地玩具〕“Hirosaki” Kokeshi Dolls and Traditional Wooden Crafts

長谷川 優志さん

令和7年度認定



長谷川さんは、県伝統工芸士である父に師事し、平成15年(2003年)から津軽藩ねぶた村及び津軽こけし館にて従事してきました。伝統的な津軽系こけしのほか、精密な独楽の製造を得意とし、昔ながらの独楽を改良して遊びやすく美しい商品を開発しています。独楽の遊び方を通じて高齢者とこどもの交流に役立ちたいという想いで日々実演販売しており、伝統工芸の普及や文化継承に貢献しています。



### 〔南部裂織〕“Nambu Sakiori”

岩淵 洋子さん

令和7年度認定



岩淵さんは、平成17年(2005年)に市民学校南部裂織教室を受講し、南部裂織工房「澄」の創設者井上澄子氏に師事。高度な裂織技術と縫製技術を有し、南部裂織を多くの人に着用してほしいとの願いから、ベストやコートなど服飾製品の製造も行っています。古布を大切に最後まで使い切るという創設者の精神を引き継ぎ、裂織体験や土産物の開発・販売に取り組み、伝統工芸の普及や後継者育成に貢献しています。



### 〔南部裂織〕“Nambu Sakiori”

工藤 久美子さん

令和7年度認定



工藤さんは、知り合いが所有する古い地機を見て感銘を受け、平成6年(1994年)に八戸さき織の会主催の教室に参加しました。千田セイ子氏に師事し、あじろ織やつづれ織など多様な技法を習得。自ら柿渋で染めた古布を使ったバッグや、青森のりんごをイメージしたシードル用のバッグなど、次々と浮かぶアイデアを実現させています。南部裂織教室で講師を務め、生徒に対して丁寧に指導するなど、技術の伝承と後継者育成に貢献しています。



### 〔南部菱刺し〕“Nambu Hishizashi”

西野 美波さん

令和7年度認定



西野さんは、南部菱刺しの復興と普及に尽力した西野こよ氏に師事。昭和55年(1980年)から従事し、こよ氏の普及活動を支えてきました。伝統的な梅花、きじの足などの模様を組み合わせ、一針一針丁寧に縫うことでふっくら仕上げるという技法を継承しています。市民館で講師を務めるほか、南部菱刺し西野刺娘の会長として会員への技術指導を行い、伝統工芸の普及や後継者育成に貢献しています。



### 〔善知鳥彫ダルマ〕“Utoubori” Daruma Dolls

新規製造者：善知鳥彫ダルマ研究会 2.5

令和7年度指定



唯一の製造者だった福井強氏の死去後、100年以上の歴史を持つ善知鳥彫ダルマの技術を継承し、魅力を後世に伝えるため、有志が「善知鳥彫ダルマ研究会2.5」を設立しました。伝統的な技法による善知鳥彫ダルマの製造のほか、インバウンド需要を見据えた商品開発・販売に取り組んでいます。

※「2.5」には、2代目福井氏から3代目となる製造者の育成に向けて、研究会が架け橋となるという意味が込められています。





## 津軽塗

Tsugaru Lacquer Ware

漆器・陶器・ガラス



「津軽の馬鹿塗り」の異名をもつほど手間と時間をかけて丁寧につくられる逸品「津軽塗」



津軽塗はおよそ 300 年前の津軽藩四代藩主信政の時代に津軽藩召し抱えの塗師池田源兵衛によって始められたと伝えられている。江戸時代には津軽藩の保護・育成の下、主に藩の調度品として用いられた。明治初期に産業として確立後は人々に親しまれる愛玩品として幅広く使われている。

津軽塗の代表格である唐塗はヒバの素地から塗り・研ぎ・磨きを繰り返して、48 もの長い工程を経て完成される堅牢優美な塗物である。唐塗だけではなく七々子塗・紋紗塗・錦塗の伝統的な 4 つの技法が現在まで受け継がれている。さらに現代風のアレンジを加えて多彩な紋様を生み出すことができる。昭和 50 年に国の伝統的工芸品として産業指定。平成 29 年に重要無形文化財として技術指定され、津軽塗技術保存会が保持団体認定を受けた。

■ 主な製品 椀・重箱・テーブル・茶器・花器・盆・箸・飾棚

■ 主な製造工程 木地固め→布着せ→地付け→仕掛け→彩色→荒研ぎ→炭はき→摺漆→艶付→上塗→完成

## CONTACT

青森県漆器協同組合連合会 / 弘前市清野袋 3-8-5 ☎0172-35-3629

津軽塗技術保存会 / 弘前市賀田 1-1-1 ☎0172-82-1642

弘前津軽塗商工業協同組合 / 弘前市西大工町 82-1 ☎0172-35-4004

株式会社たなか銘産 / 弘前市田町 4-2-2 ☎0172-36-0111

津軽藩ねぶた村 / 弘前市亀甲町 61 ☎0172-39-1511

## 津軽焼

Tsugaru Pottery

漆器・陶器・ガラス



津軽の風土を表すような素朴ながらも独特な味わいがある「津軽焼」



津軽焼の源流は津軽藩四代藩主信政によって集められた陶工たちが築いた平清水焼・大沢焼・下川原焼・悪戸焼である。藩政時代には主として津軽藩の調度品や日用雑器が焼かれていた。

しかし明治に入り鉄道の開通に伴って流入した他県の焼物に押された結果、大正時代には一時途絶えてしまう。現在の津軽焼は昭和に入って再興したものである。

現在の津軽焼は地元の土の味を生かし、釉薬に黒天目釉やりんごの木灰を原料とするりんご釉を使うものが主流になっている。このようにして作られる津軽焼は風土の特徴が生かされた素朴な色合いが魅力的な焼物である。

■ 主な製品 茶器・花器・酒器・皿類

■ 主な製造工程 土練り→成形→加工→乾燥→素焼き→下絵付け→施釉→本焼き（焼成）→完成

## CONTACT

津軽藩ねぶた村 / 弘前市亀甲町 61 ☎0172-39-1511

ひろの窯 / 弘前市広野 2-3-5 ☎0172-87-0211

高野陶房 / 弘前市清水森字沼田 16-3 ☎0172-87-5844

津軽千代造窯 / 弘前市城南 4-11-3 ☎0172-32-8465

## 八戸焼

Hachinohe Pottery

漆器・陶器・ガラス



青森の大自然を連想させる焼物「八戸焼」



■ 主な製品 花器・茶器・酒器・食器

■ 主な製造工程 成形→乾燥→素焼き→上ぐすり付け→本焼き→完成

## CONTACT

渡辺陶房 / 八戸市上野字上野平 33-6 ☎0178-23-4020

八戸焼は、江戸時代末期まで八戸の山中で焼かれていた焼き物である。藩主御用達品であった津軽焼とは異なり、八戸焼は民窯（庶民の為の焼き物）として親しまれてきたと言われている。

一時廃れてしまった八戸焼だが、昭和 50 年に渡辺昭山の手によって再興された。現在では八戸市内で採取した粘土に工夫を加え、百数十年前の八戸焼を再現している。

八戸焼の特徴は、独自の緑釉を使い、青森の自然を表現した「緑色」である。青森の豊かな自然を焼物から感じ取れる一品といえる。

## 津軽びいどろ

Tsugaru Glassware

漆器・陶器・ガラス



青森の移りゆく四季を色とりどりの表情で魅せる「津軽びいどろ」



■ 主な製品 花瓶・冷酒用徳利・盃・タンブラー

■ 主な製造工程 材料調合→溶解→成形→徐冷→仕上げ→完成

## CONTACT

北洋硝子株式会社 / 青森市富田 4-29-13 ☎017-782-5183

津軽びいどろは漁業用浮玉の製法を応用して作られるようになったガラス工芸品である。

津軽半島の西側にある七里長浜の砂を一部材料に使用し、古来からある難易度が高い「宙吹き」の技法を用いて生み出されたのが始まりである。

1500 度の高温で材料を溶解し、成形温度 1200 度という灼熱の中で真っ赤に溶けたガラスは、吹き棒に巻き取られ職人に息を吹き込まれることによって、豊かなかたちと色合いを持った工芸品に姿を変える。

現在では 9 種類の技法と多彩な色ガラスを使ったカラフルで実用的な商品が多く作られている。

## あけび蔓細工

"Akebi" Vine Crafts

木・竹工品



丹念に編み込まれ、丈夫で使うほどになじむ「あけび蔓細工」



あけび蔓細工は江戸時代の末に岩木山麓の嶽(だけ)温泉で、湯治客への土産品として、付近の山々に自生するあけび蔓を原料とし、炭籠・手提げ籠などが広く作られるようになった。明治以降には内外の展覧会をはじめ、広く海外へも市場が広がった。全工程を手作業で行い、時間と手間暇をかけて丹念に仕上げられているため、あけび蔓細工のもつ色合い、野趣豊かな手触り、基本的な並編みや中が透けてみえるこだし編みなどの多彩な編み模様は、落ち着きと自然の温かさを感じさせる。また、耐久性に優れ、使うほどに滑らかさや艶が出てくるため末永く楽しめる一品である。

- 主な製品 手提げ籠・盆・ざる
- 主な製造工程 蔓の選定→除干し乾燥→水に浸す→篩取り→底編み→胴編み→縁編み→手付け→端切り→仕上げ完成

CONTACT

有限会社宮本工芸／弘前市南横町7 ☎ 0172-32-0796

## 津軽竹籠

Tsugaru Bamboo Baskets

木・竹工品



りんご畑から生まれた丈夫で軽く実用性の高い「津軽竹籠」



竹籠を作る技術は約 200 年前に遡るが、今日のように多量に生産されるようになったのは、津軽地方がりんごの産地として定着し、作業用の手籠が作られるようになってからである。岩木山麓や八甲田山麓で採取される丈夫で耐久性に優れた根曲竹を用いて作られる津軽竹籠は、他産地の竹製品とは異なり、六角目などの大まかな編み目で、しなやかさ、軽さと丈夫さが特徴である。現在では丸籠かごや果物皿など大きさや用途に応じて様々な商品が作られている。

- 主な製品 りんご手籠・野菜籠・椀籠・果物籠
- 主な製造工程 竹採取→四割削り→編み→完成

CONTACT

三上 司／弘前市八幡字古喜田 51-4 ☎ 0172-82-3054

## ブナコ

BUNACO

木・竹工品



独自のユニークな製法で変幻自在に姿を変えることができる「ブナコ」



ブナコは、昭和 30 年代に青森県工業試験場で試作、研究の結果考案された木工品である。日本一の蓄積量を誇る青森県のブナを有効に活用するため、水を多く吸い込むブナの特徴を最大限に生かし、薄いテープ状にしてコイルのように巻き、押し出しずらして立体の物を形作ることで、材料となる木材を無駄なく使うことができる。従来の木工品にはないような形状も表現することができ、ひとつひとつ丁寧に手作りされている。現在では食器用品だけではなく、ランプやスピーカーなど、デザイン性の高いインテリア用品にもその技術は応用されている。

- 主な製品 食器・ランプ・スピーカー・ティッシュボックス・ダストボックス
- 主な製造工程 材料ひき割り→底板加工→巻き→型上げ→接着→木地調整→下塗り塗装→仕上げ塗装→完成

CONTACT

ブナコ株式会社／弘前市豊原 1-5-4 ☎ 0172-34-8715

## 津軽桐下駄

Tsugaru paulownia "Geta"  
(Wooden Clogs)

木・竹工品



厳しい風雪の中で生まれ、木質が堅く木目も美しい「津軽桐下駄」



日本人の履物として古代より用いられてきた下駄は江戸時代に広く流行したが、生活の洋風化が進むことで今日では職人の数も少なくなっている。下駄の材料には桐が最も適している。理由は軽く柔らかいうえに、反動が少なく温度変化にも強いからである。特に厳しい風雪の中で生まれた津軽の桐は木質も堅く、木目も美しい。白木の下駄のほか津軽塗下駄などが古くから作られ、しっかりとした雰囲気醸し出している。

- 主な製品 白木下駄・津軽塗下駄

- 主な製造工程 桐の切断→自然乾燥→輪切り→木取り→あいだひき→あらつき→おがみつき→わきかん→すみつけ→はなまわし→はなあけ→つらかけ→とくさかけ→完成

CONTACT

阿保下駄製作所／弘前市城東北 3-8-20 ☎ 0172-26-1588

## 南部総桐箆筒

Nambu Paulownia Chest

木・竹工品



職人技が映える美しい桐の柾目が醸し出す気品あふれる「南部総桐箆筒」



古く城下町として発達した三戸町は南部桐生産の中心地である。大正時代初期から桐材は下駄にも利用され昭和 30 年代まで全国に出荷されていた。三戸町内及び周辺の町には家具店があり明治時代中ごろから八戸周辺で桐箆筒の製作が始まったとみられている。総桐箆筒は金具のほかは釘に至るまですべて木材を使用して作り上げられる。桐の生命ともいべき柾目は、丹念な手作業が醸し出す美しさと気品を感じさせる。

- 主な製品 総桐箆筒・小箆筒・机・収納箱

- 主な製造工程 木釘作り→造材→乾燥→木取り→狂い直し→板接ぎ→組立加工→仕上げ・着色→完成

CONTACT

在家 福治／八戸市河原木字前谷地 118-3 ☎ 0178-27-5965

## 津軽伝統組子

Tsugaru traditional "Kumiko" Woodworking

木・竹工品



直線的なパーツの繊細な組合せによる幻想的な立体美「津軽伝統組子」



津軽伝統組子は、飛鳥時代から約 1300 年以上続く建築物の装飾として受け継がれている組子の一種である。細く挽いた木に溝や穴、ホゾを彫り、直線的ないくつものパーツを組み合わせることで、立体的で複雑な幾何学模様を描くことが、津軽伝統組子の特長である。その技法は籠のような模様を表現する「目潰し本篋目」、木材を縦横互いに組み付ける「本捻組」、三角形を複合し六角形の亀甲模様を織りなす「亀甲組子」など多岐にわたり、屋内装飾、行燈、衝立、屏風、球体のランプシェード、バッグなど幅広い製品を作り出すことができる。

- 主な製品 行灯、衝立、屏風、欄間、化粧組子
- 主な製造工程 切断→見込み→寸法の割出→見付仕上げ→切り出し→組立→表面仕上げ→完成

### CONTACT

津軽伝統組子館（建具工芸・齊藤）／弘前市茂森新町 3-1-13 ☎ 080-5566-7223

## 南部花形組子

Nambu Floral "Kumiko" Woodworking

木・竹工品



高度に熟練した技術が芸術的な曲線美を生む「南部花形組子」



南部花形組子は、飛鳥時代から建築物の装飾として受け継がれている組子の一種である。花形カンナという専用のカンナを用いて曲線的な加工を施し、釘を一切使わずに美しい幾何学模様を描く木工品である。原材料には主に県産材の青森ヒバを使用し、木材の種類や木肌の色の違いを利用して模様を描くことが南部花形組子の特長である。曲線的で美しい南部花形組子は和風の建具のみならず、洋風ドアや電気スタンドなど「和」だけではなく「洋」にも取り入れられている。

- 主な製品 ティッシュボックス・電気スタンド・行灯・衝立など
- 主な製造工程 小割→引割→寸法の割り出し→削り→仕上げ→組立て→完成

### CONTACT

館タテグ工芸／八戸市小中野 5-10-31 ☎ 0178-24-5438

## こぎん刺し

"Kogin" Embroidery

染織品・織維製品



厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物「こぎん刺し」



江戸時代、津軽の農民は木綿の衣料を着ることが許されていなかった。そのため麻地の着物を何枚も重ね着して寒さをしのいでいた。そこで農村の女性たちは保温と補強のために、麻の布地に木綿で刺子を施した。こうして生み出されたこぎん刺しは、厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物である。こぎん刺しの特徴は、藍染の麻地に白い木綿糸で縦の織り目に対して奇数の目を数えて手刺しすることで、素朴で美しい幾何学模様が生み出される点にある。また今日では用途によって木綿地やウール地なども用いられており、色彩も時代を経て多彩さを増している。

- 主な製品 巾着・帯・バッグ・ネクタイ
- 主な製造工程 糸より→麻地染め→生地織り→生地を整える→裁断→刺し→仕上げ→加工→完成

### CONTACT

前田セッコギン研究会／青森市安方 1-1-40-2F ☎ 017-735-5311 岩木かぢやらず会／弘前市島井野字長田 60-6 ☎ 0172-82-5109  
有限会社弘前こぎん研究所／弘前市在府町 61 ☎ 0172-32-0595 三つ豆／五所川原市中央 3-118 ☎ 090-2846-0076

## 南部菱刺し

Nambu Hishizashi

染織品・織維製品



ウメノハナ・クルミなどの多彩な幾何学紋様が美しい「南部菱刺し」



江戸時代、八戸を中心とする南部地方で南部菱刺しが生み出された。当時の農民たちは麻の着物しか着ることを許されておらず、木綿は糸として使用するものと決められていた。そこで農村の女性たちは補強と保温のために麻に木綿糸を刺して、厳しい北国の生活をしのいでいた。この技術が現在まで受け継がれている。菱刺しの特徴は麻布に綿糸で偶数目を拾って織り成されるウメノハナ・キジノアシなどの横に長い菱型の多彩な幾何学紋様である。現在では麻地以外に木綿地やウール地も用いられ、ネクタイやタペストリーなど新たな製品にもその技術は応用されている。

- 主な製品 卓布・前垂れ・のれん・バッグ
- 主な製造工程 麻地の地直し→紋様のデザイナー→刺し→仕上げ→完成

### CONTACT

天羽 やよい／八戸市長者 4-2-26-11 ☎ 0178-46-4662 南部ひしざし保存会／十和田市東一番町 8-10 ☎ 0176-23-0024  
南部菱刺し西野刺っ娘の会／八戸市長苗代字内舟渡 25-1 ☎ 0178-28-2886 高橋 博子／五戸町字古館 1-7 ☎ 090-9531-4203  
南部菱刺し工房アトリエ縹／八戸市白銀町字人形沢 6 ☎ 080-2802-0715 HANADA 北向 春枝／おいらせ町中下田 147-12 ☎ 0178-56-4107  
南部菱刺研究会・つづれや／八戸市田面木字上野平 91-7 ☎ 090-3532-4855

## 津軽裂織

Tsugaru Sakiori

染織品・繊維製品



独特の手ざわりと深みのある色合いが美しい「津軽裂織」



津軽では裂織を「サクリ」と呼ぶ。江戸中期以降津軽の海岸線地域では日本海交易の北前船により古手木綿が普及し、布を裂いて織るサクリが漁師・農民の仕事着や日常着として作られた。

サクリはその用途から薄く柔らかく仕上がるように工夫された技法で織られ、真新しいサクリは晴れ着として男たちや女たちを飾り、雪国の寒さから人々を守った。裂かれた布のささくれた風合いが独特の手ざわりを生み、古着の色の組み合わせによる時を経た深みのある色合いが魅力となっている。現在では、絹布をブナやナラ、りんごなどで染めて横糸にした綴れ織り・綾織りなどの技法を使ったバッグのほかコートなど様々な商品がある。

- 主な製品 卓布・バッグ・コート
- 主な製造工程 デザイン及び設計→機ごしらえ→裂布を作る→裂織→仕上げ→完成

### CONTACT

テキスタイルスタジオ村上 / 青森市高田朝日山 809-256 ☎ 017-739-7761 青森手織サクリ会 / 青森市赤坂 2-38-9 ☎ 090-3641-9813

裂き織り工房ボンテ / 平内町小豆沢字茂浦沢 101-2 ☎ 017-755-2765

## 南部裂織

Nambu Sakiori

染織品・繊維製品



古布を再生し新しい命を吹き込む「南部裂織」



南部裂織は江戸時代に古着した着物や布を再生する機織りの一技法として生み出された織物である。当時は、寒冷な気候のために綿の栽培は難しく、北前船で運ばれた木綿や古手木綿はとても貴重な存在であった。そのため、厳しい生活を強いられた農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれたものである。細く裂いた布を横糸に、木綿糸を縦糸にして地機で織った裂織は丈夫で暖かく、そのカラフルな色移りと複雑な機上げが特徴である。

主としてこたつ掛けや帯などに用いられてきたが、現在ではテブルカバーをはじめ現代感覚の手織物にも応用されている。

- 主な製品 卓布・手提げ袋・こたつ掛け
- 主な製造工程 整経→箆（おさ）通し→男巻き（おまき）→綾越し→糸綜統作り→元寄せ→機上げ→裂織→完成

### CONTACT

さきおり CHICKA / 青森市安方 1-1-40 青森県観光物産館 2 階 machicotoba 内 ☎ 090-4886-3801

八戸南部裂織工房「澄」 / 八戸市三日町 11-1-4F ☎ 090-9032-4044

ており工房みちのく / 八戸市河原木字袖ノ沢 2-80 ☎ 0178-28-5818

南部裂織保存会 / 十和田市伝法寺字平窪 37-21 ☎ 0176-20-8700

下北南部裂織 / むつ市田名部下道 4 むつブランドホテル 裂織館 ☎ 090-4042-1122

むつ裂織サークル / むつ市大平町 9-7

南部裂織七戸町保存会 / 七戸町宇上屋田 47-8 ☎ 0176-62-6239

仏ヶ浦裂き織り / 佐井村佐井字大佐井 112 津軽海峡文化館アルサス内 1 階 ☎ 0175-38-2939

八戸さき織の会 / 八戸市鮫町鉄砲平 5-28 ☎ 0178-34-2571

五戸町裂織愛好会 / 五戸町下タノ沢頭 48-11 ☎ 080-1816-3000

## 津軽組ひも

Tsugaru "Kumihimo" (Braiding)

染織品・繊維製品



青森の風土を感じる優しい色合いと高度な組み技術が融合した「津軽組ひも」



縄文土器の縄目模様からもわかるように、組み・編みの歴史は古い。青森では津軽五所川原近郊の生活必需品であった藁工芸品にその歴史を見ることができる。特異な気候風土の中で生活する人々の知恵と創造と美意識が生んだ藁工芸品。藁工芸品には簡単な三つ組みから、高度な技術の笹浪組みまで取り入れられている。この藁工芸品の編み方を応用し、りんごや藍などの草木染めを取り入れて津軽の命を吹き込み、津軽組ひもが誕生した。帯締めをはじめアクセサリーなどにも広く活用されている。

- 主な製品 帯締め・ブローチ・ネックレス・慶弔結び
- 主な製造工程 糸割り→染色→糸繰り→経尺→玉つけ→組みあげ→仕上げ→完成

### CONTACT

津軽組ひも工房 / 五所川原市金木町菅原 240-17 ☎ 090-2027-6106

## 津軽打刃物

Tsugaru Handcrafted Knives

金工品



優れた切れ味と耐久性をもつ実用的な「津軽打刃物」



鍛冶は古くより刀鍛冶・農具鍛冶・鉄砲鍛冶と分かれていた。近世になって包丁鍛冶が出てきたが、一般には農具・工具や包丁・鋏などを生産していた。鍛冶町という町名が示すとおり、藩政時代には弘前でも多くの鍛冶屋が軒を連ね農具や武器を製造していた。現在でも伝統的な技能を受け継いだ職人たちが刃物を中心に作り続けている。伝統的な「火造り」・「泥塗り」などの焼き入れ技術により、優れた切れ味と耐久性をもつ品質の高い包丁類が作られている。また、りんごの産地である津軽には欠くことのできない摘果・枝切り用の剪定鋏も作られている。

- 主な製品 和包丁・剪定鋏・鉈・鎌
- 主な製造工程 火造り→荒仕上げ→焼き入れ→焼きもどし→刃付け→仕上げ→柄付け→完成

### CONTACT

三國刃物製作所 / 弘前市金属町 4-15 ☎ 0172-88-0555

田澤刃物製作所 / 弘前市茂森新町 2-3-11 ☎ 0172-32-1087

有限会社二唐刃物鍛造所 / 弘前市金属町 4-1 ☎ 0172-88-2881

三國打刃物店 / 弘前市茂森町 170-3 ☎ 0172-33-2202

## 手振り鉦（手平鉦）

Teburigane

金工品



青森県内の祭りに欠かせない美しい音色の「手振り鉦」



昭和 20 ~ 30 年代頃から、岩木山への登拝行事であるお山参詣に使用され始めたと言われており、現在では、県内のねぶた祭り、ねぶた祭りなどで使用され、欠かせない存在となっている。原料となる真鍮板を切断する工程以外は全て手作業であり、金鉦やならし床を用いて真鍮を打ち出すことで強度を高め、均一に圧力を加えることで良い響きに仕上がる。持ち手は激しい演奏に耐えられるよう、組み紐で編まれる。

- 主な製品 手振り鉦（ねぶた、ねぶた、お山参詣用）
- 主な製造工程 切断→打ち出し→ならし叩き→研磨→金具作成→取付→持ち手・房取付→完成

### CONTACT

有限会社小野商会 / 黒石市山形町 75-3 ☎ 0172-52-3815

## 八幡馬

"Yawata" Horses

諸工芸品



日本三駒に数えられる櫛引八幡宮の御神馬「八幡馬」



日本三駒の一つとしても数えられ、青森県南部地方の代表的な郷土玩具・民芸品である。

古来、南部地方の一宮・櫛引八幡宮の境内馬場では「流鍋馬(やぶさめ)」が行われ、地方の優れた馬が奉納されていた。その姿を模して作った木彫り馬がそもその始まり。櫛引八幡宮の例大祭で参拝者のお土産として売られるようになり、人々はその地名より「八幡馬」と呼ぶようになる。

明治以降、社会や生活環境の変化に伴い、作り手や産地、形状や木彫り馬のもつ意味も変化しながら、郷土玩具としての形が定着する頃には、親子馬、嫁入道中の盛装馬の模様など、子供や家族の幸せを願う愛情溢れる民芸品となる。現在では結婚、新築、開業、出産、落成など各種お祝い事の記念品・贈答品として喜ばれている。

- 主な製品 八幡馬
- 主な製造工程 木取り→削り→下塗り→加飾・絵付→毛すげ→完成

CONTACT

株式会社八幡馬 / 八戸市沼館 2-5-2 ☎ 0178-22-5729

## 下川原焼土人形

"Shitakawara" Pottery's Earthenware Dolls

諸工芸品



素朴で温かみがある鳩笛が優しい音色を奏でる「下川原焼土人形」



下川原焼土人形は江戸時代の後半に九州筑前で陶磁器作りを習得してきた初代高谷金蔵が、津軽藩に召し抱えられて下川原に窯を築いたのが始まりである。明治時代の土人形人気による隆盛、ブリキなど新しい玩具の普及に押された大正時代の衰退という浮き沈みを経て、現在まで受け継がれている。

下川原焼土人形は赤土と砂を調合した粘土を石膏の型枠にはめて形を整え、約 800 度の高温で数時間窯焼きし、最後に色つけをして出来上がる。

鳩笛や干支人形が有名であるが、実際人形の種類は数百も存在する。その素朴な形と穏やかな表情によって淡い郷愁がかけられてきた。

- 主な製品 土人形・鳩笛・人形笛
- 主な製造工程 粘土の調合→型ぬき→乾燥→素焼き→地塗り→彩色→完成

CONTACT

高谷下川原焼土人形製陶所 / 弘前市桔梗野 1-20-8 ☎ 0172-32-6888  
阿保 正志 / 弘前市新里字上樋田 85-2 ☎ 0172-27-3766

## 温湯こけし・ずぐり独楽

"Nuruyu" Kokeshi Dolls and "Zuguri" Tops

諸工芸品



曲線美豊かな津軽系こけしの祖「温湯こけし」、雪の上でも回る津軽地方の伝統独楽「ずぐり」



津軽系こけしの発祥地である黒石市温湯温泉。大正時代の初めに、津軽系こけしの創始者である盛秀太郎がこけしを作り始め、現在はこけし工人が集まって「津軽こけし工人会」を結成し、伝統と新しさを見据えたこけし作りが続けられている。胴に描かれるアイヌ模様、肩を吊り上げてにらみをきかせる顔、すそで膨らんだ胸と極端な腰のくびれなどが、温湯こけしならではの特徴である。また胴体には、津軽藩の家紋から取り入れたといわれる牡丹の花も使われている。

ずぐり独楽は温湯こけしの製作が始まる前より製作が始まったとされ、津軽地方では冬のずぐり遊び文化が今も残っている。

- 主な製品 こけし・ダルマ・ずぐり独楽
- 主な製造工程 木地挽き→ロクロ線入れ→模様付け→顔描き→ロウ挽き→完成

CONTACT

津軽こけし工人会 / 黒石市袋字富山 72-1 ☎ 0172-54-8181

## 弘前こけし・木地玩具

"Hirosaki" Kokeshi Dolls and Traditional Wooden Crafts

諸工芸品



可憐で愛らしい「弘前こけし」、なつかしさの中に工夫を重ねた「木地玩具」



東北地方の工芸品である伝統こけしは 11 系統に分類される。その中の一つ、津軽系こけしは、主に 1 本の木から作られる「作りつけ」という技法で作られ、髪型はオカッパ頭という特徴を持ち、黒石市、大鰐町、弘前市で作られるこけしの総称である。

明治時代から津軽地方内の木地師及び津軽と他県の木地師との交流が盛んに行われる中で、弘前こけしは津軽系こけしの中でも大鰐系の流れをくむものとして現在まで受け継がれている。

またこの地域ではこけし作りとともにこまやダルマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。

- 主な製品 こけし・こま・ダルマ
- 主な製造工程 木地挽き→ロクロ線入れ→模様付け→顔描き→ロウ挽き→完成

CONTACT

津軽藩ねぶた村 / 弘前市亀甲町 61 ☎ 0172-39-1511

## 大鰐こけし・ずぐり

"Owani" Kokeshi Dolls and "Zuguri"

諸工芸品



素朴な中にも華やぎのある「大鰐こけし」、色彩が美しい「ずぐり」



大鰐こけしは明治初期に温湯温泉津軽系こけしの発祥地である温湯温泉から大鰐温泉に移り住んで木地挽きを始めたこけし職人たちが、大正時代になってこけしを作りだしたのが始まりである。

大鰐こけしの特徴は、張りぎみの肩からまっすぐに伸びる胴体と、そこに描かれるあやめ模様にある。あどけない笑みを浮かべるその表情は、見る者に素朴な温かみを感じさせる。

ずぐりは色彩豊かな独楽であり、雪国の子供たちの玩具として親しまれている。

- 主な製品 こけし・ずぐり
- 主な製造工程 木地挽き→ロクロ線入れ→模様付け→顔描き→ロウ挽き→完成

## 善知鳥彫ダルマ

"Utoubori" Daruma Dolls

諸工芸品



世界にたった一つだけの一刀彫ダルマ「善知鳥彫ダルマ」



善知鳥彫ダルマは青森県の文化振興に功績のあった今克巳が県の工芸品振興のために大正10年ごろより取り組んだのが始まりである。ロダンの作品からヒントを得たという、深紅の衣に包まれた瘦身のダルマが前方を見据えるという独特な風貌は、悟りを開き座禅から立ち上がって前に足を踏み出そうとする姿を表現している。

名前はその昔青森県にいた「善知鳥」という鳥にちなんで名付けられた。樹木の自然な割れを最大限に生かしたそのダルマは、一つとして同じものがない。

■ 主な製品 木彫ダルマ

■ 主な製造工程 原木の切断→割り裂き→陰干し→木取り→彫り→色付け→完成

CONTACT

善知鳥彫ダルマ研究会 2.5 / 青森市石江江渡 106-227 ☎080-1671-1487

## きみがらスリッパ

"Kimigara"(Corn Husk) Slippers

諸工芸品



カラフルかつ機能性の高さが人気の「きみがらスリッパ」



青森県の方言で、どうもろこしは「きみ」と呼ばれる。きみがらスリッパは、自然乾燥させた「きみ」の「から」、つまりどうもろこしの皮から作っている。かつて馬産地だった十和田地方は、飼料用どうもろこし「デントコーン」の栽培がとて盛んで、大量に発生する「きみがら」の再利用のために、昭和20年代の初めごろから作られるようになった。

履き心地がよく、夏はサラリと涼しく冬はあたたかいのが特徴。また、軽くて丈夫なうえ、通気性もよい。そのため主にスリッパや草履として重宝されている。また原色の染色ができることから、彩り鮮やかな配色も可能である。

■ 主な製品 スリッパ・草履・小物

■ 主な製造工程 皮の選別→乾燥→縄編み→皮の染色→乾燥→皮裂き→編み込み→仕上げ→完成

CONTACT

十和田きみがらスリッパ生産組合 / 十和田市伝法寺平窪 37-2 ☎0176-28-3611

## 錦石

"Nishiki" Stone Products

諸工芸品



磨きぬかれた光沢が美しい津軽石「錦石」



「陸奥の錦石」として名高い青森の錦石は、碧玉、めのう、玉髓などの石英に各種金属イオンが混入したことにより、複雑で格調のある色彩が交錯したものである。錦石は津軽半島周辺などで採取される天然石で、磨くと光沢とともに美しい色彩や紋様が現れる。

錦石は古くからその美しさが人々に愛されつづけ、縄文時代には「勾玉」に加工されたり、室町時代には「舍利石」として尊ばれ、遠く唐・天竺まで輸出されたり、江戸時代には津軽玉と称されてかんざしなどの装飾品として珍重されてきた。

現在では鑑賞用の美石のほか、指輪、ネックレスなどの装飾品としても広く活用されている。

■ 主な製品 美石・指輪・ネクタイピン

■ 主な製造工程 石の選別→大割り→小割り→型取り→研磨→洗浄→完成

CONTACT

小田桐錦石研究所合同会社 / 青森市西滝 3-19-27 ☎017-781-2347

えびす錦石店 / 外ヶ浜町字蟹田罫ヶ淵 20-1 ☎0174-22-1114

須藤錦石加工所 / 弘前市紺屋町 13-3 ☎0172-32-6103

## 五戸ばおり

Gonohe "Baori" (straw hat)

諸工芸品



独特の曲線が美しく実用性の高い「五戸ばおり」



五戸ばおりは江戸時代末期に考案された編み笠の一種で、軽く丈夫なことから農作業などに利用されていた。イ草の特徴である「水分を含むと網目は閉まり、雨を通さない」性質を活かし、重宝されていた。昭和40年代ごろに安い麦わら帽子などの普及により需要が減ったため、職人の数も少なくなったが、技術は現在に伝えられている。

すべてを手作業で丁寧に作り上げ、つばのふちに細い竹の芯を入れて整える独特のカーブは、見た目だけでなく視界を確保する実用性も兼ね備えている。

■ 主な製品 ばおり・ミニチュアばおり

■ 主な製造工程 あぶつら→ふち巻き→色あぶを編む→腰の部分を編む→ふち巻き→ふち止め→頭の仕上げ→あご布・紐つけ→仕上げ→完成

CONTACT

稲村 幸男 / 五戸町字新蔵長根 24-7 ☎0178-62-3423

## 目屋人形

"Meya" Dolls

諸工芸品



愛らしい緋姿の目屋乙女「目屋人形」



岩木山と白山山地に囲まれる西目屋村。かつては県内有数の木炭産地でもあったこの村では、昭和の初めごろまで馬車の入り込めない山岳の細道を、炭俵を背負って里に降りるモンペ姿の娘の姿が見られた。目屋人形はそのようなかわいらしい娘ををかたどった人形である。目屋人形は昭和の初期に若者たちが集まって村の土産物として作り始め、弘前や東京などで売られていた。需要の衰えや後継者不足から昭和40年代には一旦途絶えてしまったが、近年その再現に成功し、現在に至っている。

■主な製品 目屋人形

CONTACT

■主な製造工程 簀作り→衣装作り→胴体作り→衣装付け→仕上げ→完成

目屋人形製作部会 / 西目屋村田代字稲元 143 ☎0172-85-2828

## ねぶたハネト人形

Nebuta Haneto Dolls

諸工芸品



今にも動きだしそうな躍動感あふれる人形「ねぶたハネト人形」



「青森ねぶた祭り」は人形型の灯籠を台車に乗せて町を練り歩く青森市の伝統的な祭りである。中でも勇壮な太鼓や笛の囃子に「ラッセラー、ラッセラー」と声を合わせ、ねぶたの前を華麗に踊り跳ねる跳人（ハネト）の姿は、北国の夏の風物詩である。ねぶたハネト人形は、青森ねぶた祭りでは躍動するハネト姿をかたどったものである。イ草や浴衣地などを原材料に、頭の笠から足先まで一つ一つ手作業で細部に至るまで丁寧に作られている。今にも動きだしそうなハネトの表情は一体として同じものはない。

■主な製品 ねぶたハネト人形

CONTACT

■主な製造工程 笠編み→胴体作り→顔作り→衣装作り→衣装付け→仕上げ→完成

今井 陽子 / 青森市南佃 1-16-6 ☎017-742-6459

## 津軽凧

Tsugaru Kites

諸工芸品



勇壮な武者が舞う津軽の伝統的な凧「津軽凧」



津軽凧は弱した藩士の内職として江戸時代から作られるようになった。通常凧は竹を使って作るが、津軽地方では寒さで竹がなかなか育たない環境だった。そのため凧の骨に、軽くて弾力性に富むヒバ材を薄く削って用いるようになった。凧絵は、三国志や水滸伝などに登場する英雄・豪傑のほか、日本の歴史上の武将を題材とした勇壮な武者絵が多く描かれる。太く力強い墨の線と赤を基調とした鮮やかな色彩で描き出される武者は、弘前ねぶたさながらに見る者をひきつける。

■主な製品 凧

CONTACT

■主な製造工程 骨組の木取り→組立→墨書き→裏打ち→彩色→仕上げ→骨張り付け→縁紙張り付け→糸目付け→アンプ作り→完成

津軽藩ねぶた村 / 弘前市亀甲町 61 ☎0172-39-1511  
ねぶた・凧のなりた / 弘前市石渡 2-4-13 ☎0172-34-4960  
高橋紋章染工場 / 弘前市田町 2-1-21 ☎0172-32-0793

## えんぶり烏帽子

"Enburi" Festival Hats

諸工芸品



長い冬の終わりを告げ春を呼ぶ祭りの象徴「えんぶり烏帽子」



春を呼ぶ祭り「えんぶり」は、明治時代以降に八戸地方で民俗芸能として定着した豊年満作を祈る「田遊び」と呼ばれる神への祈願行事である。太夫と呼ばれる舞い手が、えんぶりという農具を手には、田の土をかきながら所作をする。その太夫がかぶる鶴、亀、松、竹、梅、えびす、大黒などのおめでたい図柄で飾られた烏帽子が、えんぶり烏帽子である。古来より太夫が一心不乱に舞い続けるとき、その烏帽子には神が宿り太夫はまさに神の化身になるとされている。よってえんぶり烏帽子はいわば農神の象徴として、太夫によって丁寧に扱われている。

■主な製品 えんぶり烏帽子

CONTACT

■主な製造工程 下張り→成型→絵柄の素描→色付け→たてがみ付け→前髪付け→彩飾→完成

小坂 勝義 / 八戸市長根 4-14-3 ☎0178-43-9327

## 太鼓

"Taiko" (Drums)

諸工芸品



武者魂を奮い起こす勇壮な音を響かせる「太鼓」



太鼓は津軽地方の祭りであるねぶたには欠かせないものであり、藩政時代から現在まで受け継がれてきた。津軽の太鼓は弘前の工芸品である桶を用い、胴に馬や牛の皮張りをして作られる。太鼓の生命ともいうべき皮の部分は、毛の処理・なめし・乾燥・皮張りなど全工程手作業で行われている。特に厚さ2ミリメートルに皮を削る作業は伝統の手技である。現在は青森の短い夏に迫力を添えるばかりでなく、楽器や神事用として広く全国各地に出荷されている。

■主な製品 桶大鼓・長胴大鼓・附締大鼓

CONTACT

■主な製造工程 原皮塩抜→原皮の油及び肉の除去→原皮毛抜→皮の乾燥→皮の削り→皮張り→皮縁塗装→桶胴塗装→ひも染め→組立→完成

塩谷大鼓店 / 弘前市南大町 2-1-3 ☎0172-32-9556

## 金魚ねぶた

"Kingyo" (Goldfish) "Neputa"

諸工芸品



津軽の祭りに欠かすことのできない夏の風物詩「金魚ねぶた」



弘前ねぶたは、1722(享保7)年に初めて文献に登場して以来、様々な形のねぶたが時代を彩ってきた。江戸時代、金魚は一部の上流階級の間でしか飼うことのできなかつた高級魚であった。庶民は憧れを抱き、それをねぶたにして子供たちに祭りの時、提灯のように持たせ練り歩いたとされる。「金魚」はその名の通り金運をもたらす幸福を呼ぶ縁起物として長きに亘り、廃れずに今現在も市民に親しまれている馴染み深い工芸品である。近年では、祭りのみならずインテリア装飾やお土産としても人気を集めている。また、様々なバリエーションの金魚ねぶたが製作され、伝統工芸の新たな発展と話題作りにも努めている。

■主な製品 灯籠

CONTACT

■主な製造工程 竹割→骨組→紙貼り→墨書き→ロウ書き→彩色→仕上げ→完成

津軽藩ねぶた村 / 弘前市亀甲町 61 ☎0172-39-1511  
ねぶた・凧のなりた / 弘前市石渡 2-4-13 ☎0172-34-4960  
高橋紋章染工場 / 弘前市田町 2-1-21 ☎0172-32-0793

## 伝統工芸品の海外展開

青森県では、本県工芸品の海外への販路開拓に積極的に取り組んでいます。

### 香港ホーム・インスタイル 青森県ブース 出展（令和7年度）

経済交流の促進に向けた覚書（MOU）を締結している香港貿易発展局と連携し、令和7年（2025年）4月に、香港の国際見本市「ホーム・インスタイル」に出展しました。

南部裂織・津軽塗・こぎん刺しの県内工芸品関係事業者3者が参加し、本県工芸品の魅力発信と、海外への販路展開に向けて、意欲的に海外バイヤーとの商談を行いました。香港では青森県の認知度が高いほか、ハンドメイドや伝統的なものが好まれる傾向にあり、青森県ブースは多くの来場者でにぎわいました。



### フランス・パリ「Maison Wa(メゾン・ワ)」における展示販売（令和6年度）

フランス・パリの中心部に位置する日本産商品のショールーム「Maison Wa(メゾン・ワ)」に、初めて青森県コーナーを設置し、令和6年（2024年）の6月から翌年2月までの約8か月間にわたって現地バイヤーへのPRを行いました。

リメイク、リユース、リサイクル、自然との共生、サステナビリティ等を象徴する「Re」をコンセプトに、県内9事業者が、ブナコ・津軽びいどろ・こぎん刺し・南部裂織・南部菱刺し・津軽打刀物・津軽塗・りんごの木工品の商品を展示販売し、欧州における県産工芸品の認知度向上につなげました。



令和6年度（2024年度）の「MaisonWa」(フランス・パリ)参加事業者をご紹介します。

<p><b>ブナコ株式会社</b></p> <p>世界自然遺産に登録されている白神のブナ原生林がある青森県は、日本一のブナの蓄積量を誇っています。そこでブナを活用した付加価値の高いものを作りだそうと考案されたのがブナコです。テーブル状にしたブナ材をコイルのように巻き、押し出しずらして成型するというブナコ独自の製法により、テーブルウェアやランプなどの独特の美しさやぬくもりが感じられる製品を提供しています。</p> 	<p><b>北洋硝子株式会社</b></p> <p>漁業用の浮玉製造で培った「宙吹き」の技法を活用して生み出された、青森の自然をイメージしたハンドメイドガラス「津軽びいどろ」を製作しています。職人たちは、新たな技法の習得や美しい色ガラスの調合など、常に新しい技術の習得へのためみない努力を続け、現在では、多様な技術・技法、独自で調合する世界的にも類をみない色数を活かしたガラス製品となっています。</p> 	<p><b>有限会社 弘前こぎん研究所</b></p> <p>北国の寒さ厳しい風土の中、青森県津軽地方の農家の女性たちが生み出したこぎん刺しという技法を活用した製品を製作しています。こぎん刺しは、ただ布を補強するだけでなく、そこに様々な模様を生み出しながら発展し、現在では濃紺の麻布に白い木綿糸で刺す伝統的なスタイルから、カラフルな色使いまで、現代の生活に馴染む商品と なっています。</p> 
<p><b>有限会社 木村木品製作所</b></p> <p>りんごの生産量が日本一の青森県弘前市で、1974年に創業した木工所です。太く長い部材が採れない上、こぶ目・節目が多く薪とされる以外、は毎年廃棄処分されてしまうりんごの木を大切に活用し、これまで培ってきた日本伝統の木工技術を使いながら、りんごの木の木目色の美しさや肌触りの良さを活かした木工商品を製作しています。</p> 	<p><b>有限会社 二唐刃物鍛造所</b></p> <p>津軽藩より作刀を拝命して以来 350年の伝統を持つ鍛造所です。受け継いだ技術に応用し、現在ではコレクション需要もある海外向けに、特殊な厚手鋼材を加工する製法により他社では作れない複雑な紋様を浮かび上がらせた包丁「暗紋」シリーズに注力しています。少量生産ながらも高付加価値のものづくりを行っています。</p> 	<p><b>マスグラフィックス</b></p> <p>青森県津軽地方を中心とした伝統工芸品「津軽塗」の技術の継承とさらなる発展を目的として、新しい津軽塗ブランド「KABA」を立ち上げ、丁寧な手仕事と職人の感性を活かした津軽塗のデザインを日常で楽しめるアクセサリーやテーブルウェア製品を企画・開発、販売し、新たな市場の開拓に取り組んでいます。</p> 
<p><b>つづれや</b></p> <p>草木染めで染め上げた木綿糸で麻布に刺繍をする「南部菱刺し」の技術を用いて、現代の暮らしと調和した商品を製作しています。商品の製作のみならず、ワークショップも各所で開催するなど、積極的に活動し、先人の知恵を後世に受け継いでいます。布製品はもちろん、デニムや皮を使った製品も製作しており、常に新しい発想でものづくりをしています。</p> 	<p><b>さきおり CHICKA</b></p> <p>青森県南部地方の、農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれた「南部裂織」の技法を応用して、テキスタイルを製作しています。昔ながらの地機を使用して、古布を裂いた緯糸と、異素材の糸や草木染めの糸を組み合わせて織り上げ、暮らしのアクセントとなるような作品を製作しています。</p> 	<p><b>三つ豆</b></p> <p>「伝統的なものを身近に彩る」をコンセプトに、青森県津軽地方の伝統工芸「こぎん刺し」の技法を活用したアイテムを製作しています。「中まで赤〜いりんご」の摘果染めなどの草木染め糸を使用した現代生活に馴染む色使いと、古作こぎんの伝統的な図案を融合させることで、伝統技術・技法を継承しつつ、若い消費者にも手に取ってもらえる商品を製作しています。</p> 